

027

37

1



賀喜流傳之書

027
31
1



卷之三

金鏡錄

秀吉



林のりと城

津田 研山の内に本味
志賀の當年はその事

爲る事日々忙走す
事

義市 郡の事

詩

辻説叢人メおどろきよと

かづのまわせようむすめ

飄草なづくはよひよ

人上手の枕のまよひよ

や狂言綺詰れともぞく

川を聞く童子向くい

荷がさるゝ人説諧

袴月前人黒豆

尺文説諧 自悦

七月八月初て佛法びろひ
通度方便山ほほまん

心うだく一封萬人西れり

破き衣冠宋威も風

本食人心を地と菴あら

ぬき畜生も萬人よすり

有の影えんと園伽くじ
りもも焼く身れり

町底ホダヤよ苦惱カクノリとし袖の身
不思議フカトガ不つねりの爲カナヘす
も物の運ハタツのきあひだらむ
それがるれ三寄カイを圍カツマツ
僧ソウジ向カタマリ男女頗城タタ一休ウ
ち云クモリ色セキ也レキ是セ色セキ
或ガゼン人の座シテ浮ハラ木キの
見シテは月ヅキ見シテは月ヅキ
自力ジリョウ蓄能カクヨウ花落カク風ウのあ
石イシ光ヒカリおげふ世セ人ヒト中
海シマうつをすシマじととをはる
さいのがくよわくひくん
かくく在カクク比ヒ丘ク石イシの強エ
熊クマ生アリと後アリ生アリの下シタ
みかわ浦ミカワコ人ヒト浪ヨコ本ハラ綿ウラ花ハナ
走ハシマて殊ハシマ數ハシマ多ハシマく
方丈カタマツ掃ハラヒあらひまつめ
煤掃ハラヒ火宅ハタチの門モ手ヒ等タタ

大もや百万遍^ニよ渕^シん

あやうまもとよ疫病乳

極^{ヨリ}玉やねの^{シテ}かくらはの彼の

飲酒解^クれ秋人^レの風

毒^{アヒ}と^{シテ}邪淫^イの麻^ハ声^シら

尾上^テの寺^ハよ^シを發^{ハシ}む

が^ハま^スて^{シテ}被^ハ佛^ハ食^{ハシ}む^カホ

護^カぐ^レ壇^ハ伽^ハ羅^ハム^カガ

明玉^ハの傳^ハが^ハテ^{シテ}入^{ハシ}る^カ

阿^ハ呼^トい^ハし^ル白^ハ古^ハい^メ

母^ハお^シ慈^ハ蒼^ハ海^ハ濟^ハ一^ハ聲^ハき^ル

目連記^トり^ハむ^シ道^ハ心^ハ

一遍^ハの^シ因^ハの^シも^シも^シな^レ

讚^ナ佛^ハ業^ハえ^シん^シご^シく^レ

堂供^ハ養^ハの^シと^シ御^ハ出^ハし

月光地^ハよ^シと^シ本^ハ運^ハく^レ

憐^ハこ^トう^シ神^ハ小^ハ神^ハ少^ハ也^ハ

徳^ハ第^ハも^シく^シ少^ハ也^ハ

祐引葉風あくみ庵の
八藏田中女郎作

花牛幸がく精進けの
梅山と蒼室入軒
觀念の窓のよども消く
魔界よへん三人物の羽風
玉惠法師何古文記
独ちきゆか佛道の世よ
おも是是先ナキ延い故

うあくハ後歎むすまへ娘
要風ひたま我津よもみ
一座ハとくに教かる傳
そぞくよ七宝莊嚴銀次方
打一加藍のいふを金施主
蓮五郎奈良の若人称
淳しき道よらりかむ
冬秋の月四日す遊じ
牧のく人財バ妻才ハ怪

隨處の波うちうるる

石塙すうれし本願

日傭た自力か他力

一念化性酒のひをむ

千葉と鷹原がよめく

名利の所もあひの中

けと夜あはくともあがむ

三途の鬼じごく太平川

仲陰ねほ谷谷すれ逗留

走肺すじ空裏にけり

銀瀧の山城はくまくま

笠置すなて東莫落

すじこぼれすくじく

一寸ちくちく地獄をぬけ

世尊拈花すくまくびん

淨土の春入後お魚市

教すまことの心をかむと

うぐれ白いもの観音

余是初頃より寺へ取りよ
おうせひ年よりとより
去多陀羅尼ナシ
江ノノリハタタク真室
侍の悪口ぬ舌えに也
梶原源左十玉乃亦
津多理も育む傳宣ハ
多の賦をこまく月待
花血千種の事と至矣
ウキシテ多き佛具在れ
坊主底心をほほん風の事
も根柢あると観念れ念
ト人仲とそちんぐくす
ノハシ宿毛真如平等
一川去并よ法語玄關
生死莫大と心得トヘ
自らとたゞ輪廻の
殊定の西國へとむく

新刊本
惜也用之
山中子元
文一
水

延寶五丁巳歲

青陽仲完日

